

<町史だより>



※まちの秘話①

各分野の委員の方々の調査によって明らかにされた情報を定期的にお知らせします。

～ 東芝三重工場の設置 ～

町史の編さん事業が始まって1年半。「東芝の町」と言われる朝日町の近現代史では、当初から東芝三重工場の設置などに関する歴史的な資料の調査が大きな課題となってきた。今後、詳細な調査を進めるには同社についての予備知識が必要で、目下勉強中である。

同社は昭和59（1984）年に社号を（株）東芝と改称し、東京芝浦電気（株）の略称を使うようになり、本社を東京のJR浜松町駅前の東芝ビルディングとした。25年程前、同ビル内のコスモ石油（株）本社を三重県史編さんのために訪ねたことがあるが、地上40階の立派なビルで、浜松町駅から専用連絡通路があったことを今もよく覚えている。そのビルの所在地が東京都港区芝浦1-1-1で、東京芝浦電気（株）はここから名付けられたのだろうと気楽に考えていた。

ところが、今回種々調べるうちに同社の沿革には大きく2つの会社の流れがあることを知った。それは東京電気（株）と（株）芝浦製作所で、それぞれ長い歴史があり、昭和14年7月に2社が合併して東京芝浦電気（株）となり、本社を当時の東京市京橋区西銀座に置いた。既に昭和63年3月に発刊された『東芝三重工場50年史』に2社の合併のことは触れられており、認識不足を感じながら国会図書館の「近代デジタルライブラリー」で2社の社



【進む工場建設（創業当時）/ 写真：『東芝三重工場50年史』から転載】

史を検索してみた。すると、そこに『東京電気株式会社五十年史』と『芝浦製作所六十五年史』の2冊があった。いずれも昭和15年に東京芝浦電気（株）が発行したもので、合併を機に2社の歴史をまとめたのである。東京電気（株）は明治23年（1890）年に「白熱舎」を創立して白熱電球を製作し、明治32年に東京電気（株）となる。一方、芝浦製作所は明治8年に田中重久翁が新橋で電信機の製作を始め、のち工場を芝浦に移して田中製造所と称して電信機のほかに海軍兵器なども作った。明治26年に三井銀行が田中製造所を継承して芝浦製作所と改め、明治37年には株式会社組織にして独立した。大正11（1922）年には神奈川県橋樹郡町田村（のち横浜市鶴見区）に大規模な工場用地を求め、大正14年に第1期工事を完成させ、以後もこの鶴見工場を拡大して電動機や発電機などを製造し、芝浦製作所の中心的な工場となる。

朝日村への三重工場の設置については『東芝三重工場50年史』に詳しく、特に昭和37年12月1日付けで朝日町2人目の「名誉町民」になられた本田熊夫氏（第8代三重工場長＝昭和34年9月～37年11月）の回顧談が収録されており、設立当時の状況がよくわかる。本田氏は大正12年に芝浦製作所に入社され、32歳の時に鶴見工場長から三重工場新設の担当を命じられた。昭和12年のことで、その頃には民需・軍需ともに注文が急増し、鶴見工場だけでは限界があった。新工場へ重電機（モーター）の製造部門を移